発刊によせて

「明日、なにをすべきか分からない人は不幸である」。味わうべき、ロシアの文豪ゴーリキーの言葉である。人間、目的なく生きるのはいかにも空しい。出世と金のために生きている人も多いが、それは目的を持った生き方ではなかろう。出世や金は、人生の目的ではなく手段にすぎないからだ。実際、そうした人の顔をみると、目的を忘れた人に特有の空虚さがにじみ出ている。

それでは、生きる本当の目的は何だろうか。神や仏のためとか、国のためとか言う人は、今では少なくなった。人類の平和のため、弱者のためというのも、いささか肩肘張った感がある。やはり自分自身のため、具体的には、楽しく幸せな人生を送りたいというのが大方の本音ではあるまいか。

楽しむために生きる。こうした人生観は、決して利己的なものではない。誰しも、自分一人では本当に楽しめないと思う。周囲が苦しんでいるのに自分一人だけ楽しいという状態など、しょせん長続きはしない。われわれは、本然的に他人と一緒に楽しもうとする。人間が社会的動物と呼ばれるゆえんである。

また、楽しむために生きるのが浅薄な考え方だというのも誤解である。世の中には高邁な理念が多々ある。だが、例えば自由にしても平等にしても、元々は人間同士が楽しく生きるために唱えられた理念だろう。一頃の革命思想のように、自由や平等のためと称して血の犠牲を正当化するようでは本末転倒にすぎる。宗教についても同じことが言えよう。此岸の楽しみを否定し、彼岸の理想ばかりを高唱する。そのような宗教を本物とは呼びたくない。本物の宗教なら、此岸／彼岸の対立を超えた絶対的な地平に立ち、此岸の現世を大きく包むはずだ。現世的な楽しみも与えられない宗教は偏頗であり、真の絶対を知らないと言われても仕方がない。

要するに、思想であれ、宗教であれ、人間が楽しく生きるためにある。そして、善き思想や宗教を通じてこそ、より深みある人生の楽しみが得られる。思想・宗教と言うと、押しつけがましい説教のイメージを抱く人もいよう。少し発想を変えてみたらどうか。思想や宗教は、ある意味で顕微鏡のようなものである。われわれの肉眼で捉えられない微細なウイルスが、顕微鏡を使うと明瞭に見える。それと同じで、普通に生きているとなかなか気づけない世の中の道理が、善き思想、善き宗教を通せば見えてくる。

人生を楽しむうえで、実は優れた思想ほど便利なものはない。『論語』などは、時代を超えて人間社会の真実を見通す最高の顕微鏡であろう。儒学を基本理念とする東日本国際大学に東洋思想研究所が設置されて、はや六年が経過した。人の世に「楽」を送る思想探究の場として、本年も『研究東洋』を発刊したい。

平成二十七年二月吉日

東日本国際大学
東洋思想研究所所長
松　岡　幹　夫